

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.25 No.6 June 2024

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University



6

CONTENTS

・巻頭言

話を聴くということ

／井上 昭洋 1

・文脈で読む「身上さとし」(13)

明治 22 年 1 月

／深谷 耕治 2

・英語文献にみる天理教 (4)

The Church at Home and Abroad (2)

／尾上 貴行 3

・音のちから—中国古代の人と音楽 (20)

出土楽器が語る音の世界—楽懸—

／中 純子 4

・ヴァチカン便り (68)

現法王、自叙伝を刊行する

／山口 英雄 5

・ニューヨーク通信 (20)

ニューヨークセンター初代所長上原眞雄氏を偲ぶ

／福井 陽一 6

・おやさと研究所ニュース 7

2023 年度おやさと研究所特別講座
「教学と現代」「社会の中で問われる
宗教の役割と使命」報告 (金子 昭)
／第 364 回研究報告会 (1 月 31 日)
／第 365 回研究報告会 (2 月 26 日)
／新刊紹介

巻頭言

話を聴くということ

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

その昔、ハワイ人のキリスト教を調査するために、ハワイ人牧師や信徒ら 30 名あまりにインタビューをしたことがある。テープレコーダーで録音し、その全てを文字起こして何度も読み直し、あれやこれやと考えつつ論文を執筆した。ハワイ人の中では Talk Story と呼ばれるコミュニケーション・スタイルがある。一見ただのお喋りだが、口頭伝承の文化に根ざした彼らの習慣であり、その「お喋り」で先祖の叡智や物語を伝え、仲間同士の紐帯をより強いものにする。ルースにとりともめなく続くが、豊かなメッセージを湛えたお喋り。それが Talk Story である。

インタビュー調査の目的の一つは、ハワイ人キリスト教徒とハワイの伝統宗教の関係について調べることであった。その伝統の一つにアウマクア信仰がある。アウマクアとはオハナ (家族；一族) の祖先神・守護神のことで、人は死ぬとアウマクアの世界に属しながら、子孫にメッセージを送ったり、忠告や警告をしたりすると信じられている。アウマクアもオハナの一員であり、様々な生物や自然現象などに姿を変える。その信仰は代々引き継がれていくが、ネイティブ・アメリカンのトーテムのように外婚集団を形成したりしない。もちろん、この伝統を失ってしまって自分のアウマクアについてよく知らないハワイ人も多い。

ハワイ人キリスト教徒にとってアウマクア信仰はセンシティブな問題なので単刀直入に尋ねることはできない。それなりに時間をかけて他の四方山話も織り交ぜながら話を進めることになる。短くて 1 時間半、長ければ 5 時間以上。オープンエンディッドのエスノグラフィック・インタビューにしても少々長い。あれやこれやと話が進めば、ほとんどそれは Talk Story だ。そうしてようやく本題に辿り着き、アウマクアについて話してもらうところまでこぎつける。例えば、ある年配の女性信徒は、以下のような話をしてくれた。

昔は、人々はそれらの面倒を見ていたのね。でも、世代が変わるごとに新しいやり方が生まれるでしょ。そしてキリスト教について学んだら、さあ古いものは捨てて、神が創造したものについてもっと学びましょう、ということになるでしょ。そうして、これら古いものは、文化的なものとして、単なる伝統として放置される。私の場合、母親の家系はアーヌエヌエ (虹) で、父親の家系はナイア (イルカ) とマノー (サメ) だった。私の夫もマノーとナイア、その系統だったの。

こうして彼女からアウマクアの話聞き出し、アウマクアには虹のような自然現象、イルカやサメなどの生物がおり、父系と母系の双方から引き継がれることが分かったわけである。また、彼女はアーヌエヌエに助けももらったエピソードも話してくれた。夫とドライブ中、霧が濃くなってきたので路肩に車を停めたところ、虹がボンネットにかかっていた。それを見て夫はここを離れた方が良いと言ひ、霧も晴れてきたので再出発したが、虹はどこまでも車について来る。交差点にさしかかる頃に虹は消えていたが、そこで警察官の職務質問を受け、自分たちが一時停車していた場所で交通事故が起こり死傷者が出たことを聞かされたのだった。虹が自分たちに危機が迫っていることを教えてくれたのではないかと夫婦の間で話し合ったという。

このようなインタビュー・データをもとに論文を書いたのだが、彼女が 2 時間あまりのインタビューでただの一度も「アウマクア」という言葉を使っていないことに気がついたのは、ずいぶん後になってからのことだった。それは彼女にとってその名を口に出すのも憚られるほど距離を置かねばならない存在だったが、同時に具体的な守護のエピソードを話すことのできる存在でもあった。アウマクアは彼女にとってアンビバレントな存在であることを私は聞き逃していたのである。